
雷鳴

カサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷鳴

【Zコード】

Z5614D

【作者名】

カサ

【あらすじ】

穏やかな少年時代をすごしていたある夏の日、父親から大難問を押し付けられた私は、1日かけた大冒険の旅に出る事になる。

その頃の福岡はまだ有機質の風が吹く街で、電信柱やどぶ板は木製で家と家の間には隙間があつて、その隙間は背の高い雑草で埋まつていた。私の両親は個人のブロック工事請負業をしていた。普段は親父が仕事に行く仕度をしている間にお袋が私と妹に朝飯を食わせて、学校に送り出してから仕事に行くのである。私は小学3年、妹は4つ年下で保育園に通っていた。小学校と保育園はすぐそばにあつたので、一緒に家を出て妹を保育園に送つてから学校に行くのである。

学校に行く途中に難所が2つある。1つは垣の長い家があつてその垣の隙間からその家の番犬が横を通り私たちに吠えかかるのである。もちろん鎖で繋がれているので噛みつかれることはないのだけれど、大きな犬なので分かっていても怖いのだ。もう1つは神社横の八百屋のおばさんでお店を開けながらその前を歩く人たちと話のが好きなようで、いつも私たちが通ると話しかけてくる。これが単に朝の挨拶だけですむなら何でもないのだけれど、話題が豊富で立ち止まつて聞いてやらないといけないような雰囲気で子供ながら間がもてなくて辛いのである。

そんな繰り返しの毎日だったが、今日からは少し違つている。今日から夏休みで、妹は親父たちが仕事に行くときに一緒に送つていく。残された私は朝から昼の12時までは家で宿題して、用意されている昼飯を食つたら、麦わら帽子にランニング・半ズボンのまま夕方まで友達と遊びほうけて良いのである。そんな日々をおくつて

いた時に親父が大難問を突きつけてきたのである。

「お前、上野（親父の実家、アガノと発音する）のおばさん家を覚えとうか？」親父

「うん、知つといよ。三本杉のとこから入つたとこやろ？」私
「そうたい、おばちゃんに託け（いどづけ）があるけん、明日持つ
ていつちやりんや？」親父

「えつ俺が？家は知つとうけど、行き方は知らんよ」私

「バスの乗り方は紙に書いちゃるけん、それ見て行つてきやい。明日
日はお母さんも仕事やし保育園も休みやけルミコ（妹）も連れて行
きやいね」親父

「えええ、、、1人では1度も行つた事ないとよ、、、」私

「なんや、なんや、お前は。男のクセに情けないの。行ききらんと
か？」親父

「うんにや、そんな事ない。行ききいくぞ。よかよ。明日行つてく
るよ」私

「そしたら久しづびりの田舎やけん、その日はおばちゃん家に泊めて
もらつて翌日同じようにして帰つてこい。」親父

どうも親父に言いくるめられた感がするが、情けないと言われて
は後にはひけない。翌日、バスの乗り方を書いた紙と託けや着替え
を詰めたりユックにお茶を入れた水筒を持たされて、妹と親父の実
家がある田舎に向かつたのである。

〔昇町～天神。バスセンター～直方。バスターーミナル～上野〕

私が住んでいた街は「筑紫郡春日町」…今の春日市で、そこから
親父の実家に行くには一度福岡天神に出て、バスセンターからバス
に乗り、直方の国鉄バスターーミナルを経由して上野へ行くのである。
時間にして5～6時間のものだが、それが途方もなく遠い道の

りに感じられていた。行き先不安の兄妹1泊旅行の旅立ちである。

西鉄福岡駅

親父が渡してくれた紙には、家のすぐそばにあるバス停から福岡天神に行くバスに乗るよう記されている。事実そうすれば問題なく天神に行くのであるが、本数が少ないのである。子供の私には、時刻表が読めないし、行き先が書かれている文字が分からないので、来たバスが何時のどこ行きのバスなのかが分からぬ。仕方ないので車掌さんに「天神にいきますか?」と訊くしかないのだ。当時のバスは今のようにワンマンバスではなく、運転手と車掌の2名乗務が常だった。

「このバスは雑餉隈営業所行きだから、天神にはいかないよ」車掌
「雑餉隈、、、。そしたら、そこから西鉄雑餉隈駅は近いですか?」

私

「あ、うん、すぐそばだよ。」車掌

「あ、乗ります。乗ります。」私

私は、お袋が天神に出るときは春田からいつたんバスで大橋へ出て、電車で福岡駅（天神）に行っていたのを覚えていたのだ。しかも天神で探すバスセンターは駅のすぐ真下にあるのも知っていたので、ためらわなかつたのだが確証はなかつた。

「お兄ちゃん、電車に乗ると?」妹

「うん、お母さんと何べんか行つた時も電車で行つたつちゃん。でもザツシヨノクマとか言う駅やなかつたような気がするなあ」私

実は雑餉隈駅は大橋駅の隣の隣で、西鉄大牟田線の駅は、出発駅

から順に「福岡」・「薬院」・「高宮」・「大橋」・「井尻」・「雑餉隈」・「春日原」～と並んでいて。不安はあるものの、雑餉隈という地名がよく聞く地名だったので比較的安心して乗ったのである。

「次は終点、雑餉隈。」車掌

「車掌さん、駅はどちら側にあるんですか？」私

「電車の駅ね？ ほら、そこに線路があるうが。あれの横に沿つて道があるけん、その道ば行けばすぐに駅に行くよ」

「天神に行きますか？」私

「そら行くさ。電車の終点やもん。駅はね、天神までしかないとよ」

不安は少し解消された。線路を横に見ながらしばらく歩くと駅があつた。何度か見たことがある風景である。ここで天神までの切符を買わなければならない。他の人の様子を見て改札の横の小窓に行つた。この小窓に行き先を言えば売つてくれるようだ。

「天神まで。子供2枚ください」私

「はい、40円が2枚ね。80円です。お母さんは？」係

「お母さんは仕事。託けを持っていきようと」私

「そうね、天神へ行く電車は、駅の中の階段を上がつて、向こう側に行きんさい。きた電車ならどれでも天神までいくけんね」係

妹は電車に乗るのが嬉しいようで、妙にはしゃいでいる。だいたい間違つてはいない方法で行つてはいるはずだが、どこか不安はぬぐいきれない。この電車に乗つて、うつかり東京とかに行つたら2度と帰つて来れないような不安を感じていたのだ。

福岡と言つ町は大きく2つに分かれている。西鉄を中心とした「

「福岡天神」と呼ばれるところと、国鉄を中心にしている「博多」で、それぞれの鉄道ラインが福岡の町を並走しているのである。どちらの電車を利用するかは、住んでいる地区で決まつてきるのだが、私たちは西鉄の支配するエリアに住んでいたのである。

「次は福岡へ、福岡駅へ。終点です」

電車の片方の自動扉がいっせいに開いて、人が流れるように外に出て、どの人も同じ方向に歩いてゆく。私たちもその流れに遅れないよう、小走りでついて行く。福岡駅は天井が高く、ドーム型をしていて、駅内放送や出発を知らせる笛の音が鳴り響いてやや煩いが、この雰囲気はお袋と何度も味わった事があるので、ここは間違いなく来たことがある。

改札を出てすぐに下に向かう階段がある。その階段を下に降りるとそこがバスセンターのはず、妹の手を引いて行くと、今までの音とは違う別のタイプの騒音に変わる。バスセンターからそれの行き先に出発していくバスの加速する音である。間違いない。ここからバスに乗れば良いのだ。

「お兄ちゃん、ものすごくいいばいバスがあるね。どれに乗ると?」

ルミコ

「分からん、みんな同じに見える。切符を買つときに訊けばよかくさ。」私

乗合バスは乗つてから切符を買つのですが、長距離バスは事前に切符を購入する事を知つていて、以前母親がそうしたように窓口で切符を購入した。

「直方（ノウガタと発音する）のバスター・ミナルまで子供2人」私

「はい、あら、あんたたち2人だけ？お母さんは？」係

「お母さんは仕事で、僕たちだけでお母さんの家に託けを持つて行くと。」私

「そうね、そりや偉いね～。あそこの3番乗り場から乗るよ。」係
「分かつた。3番やね。」私

バスセンターは乗り口が、行き先方面別に7～8番ほどあって、筑豊方面は3番のようである。3番乗り場には発車時間待ちのバスが待機していて、その前に何人か並んでいた。私たちはその列の一番後についた。このバスに乗れば、直方のバスター・ミナルに連れて行つてもらえるはずである。

直方バスター・ミナル

グワー、グワーと次から次にバスが発車していく。3番乗り場の列も長くなってきて、出発の時間が近づいてきているようだが、私は気になる事があった。バスの入り口のところに、行き先が書かれた小窓があつて、「直方」と書かれていたら安心するのだが、見たこともない「飯塚」と書かれていたのだ。でも窓口で3番から乗れと言われたし、本当にこのバスでいいのか？

「おばさん、すいません。このバスは直方に行きますか？」と前に並んでいる人に訊いてみた。

「いいえ、これは飯塚行きよ。直方へ行くのはこのバスの後ろに来ているあのバスに乗らなきゃ行かないわ」女

「直方のバスター・ミナルに行く？」私

「そうね、あそこはバスター・ミナルになつてるわね。」女

危機一髪、訊いていなかつたら、間もなく間違つたバスにのると

「こうだつた。

「切符を見せて御覧なさい。」女

「これ？」私

「うん、直方のバスター・ミナル行きね。乗り場はここでいいんだけど、この次に出発するバスに乗るのよ。お母さんは？」女
「お母さんは仕事。お父さんに言われて託けを持って行かないかんじ。」私

「そうなの、いい子達ね。おしつこない？直方までは遠いから乗る前にすましておくといいわ。」女

「お兄ちゃん、おしつこ。」ルミ

「おばさん、ありがとう。」私

「急ぎなさいよ。あなたたちのバスももう一分ほどで出発するわよ。」女

用をすませて戻つてみると、さきほどの女の人はバスに乗つて行つてしまつたようである。3番乗り場には、それまで後ろにいたバスが進んできていた。

「こ」のバスは直方のバスター・ミナルに行きますか？」私

「行きますよ。直方のターミナルは終点だからね。最後まで乗つていたらしいよ。」車掌

バスは福岡の中心街天神の百貨店やビルの合間を抜けて進む。妹を窓側に座らせ、水筒のお茶を飲ませて、やつと一息ついた。私も妹の頭越しに風景を眺めていたが、建物の高さが低くなる前に眠つてしまつた。朝から緊張に連続ですっかり疲れていたのだ。

当時の北九州・筑豊地区は、戦争に負けたとはいえ日本の重工業の要で、敗戦後の復興に欠かせない製鉄・鉄鋼業で賑わっていた。

直方はその筑豊のほぼ中央に位置しており、北九州と福岡との中間でもあり、交通の拠点になっていた。今でもこの工業地帯から直方発、佐賀鳥栖経由のトラック輸送で、九州各地や本州へ物流されている。

「あんたたち、起きんね。直方に着いたよ。」車掌

「あ、おい、ルミコ起きらんか。着いた。着いた。」私

私たちの向かう上野（アガノと発音する）は、田川郡赤池町上野と言つ住所だが、現在ではもうない町名で、今は行政の市町村合併で「田川郡福智町上野」と言つ。直方の西に隣接する町で、もうあと少しの距離のところまで来ていた。ここからバスを乗り換えて、おばの家に向かうのである。

それでも直方は田舎の地方都市で、バスターーミナルは直方の中心にあるにもかかわらず、電車の駅、ビルと一緒になった、福岡天神のバスセンターとは比較にならない小さな規模である。平屋のビル部分はどうにかバスターーミナルの雰囲気はするものの、ほとんどは瓦屋根の建物で、学校の渡り廊下のような乗り場が並んでいるだけだった。

ターミナルの角には出発を待つ客用の待合室になつていて、その横には立ち食いうどんの暖簾が出ている。今は全国どこにでもある立ち食いうどんだが、筑豊が発祥の地ではないかと思うほど早い時期からこの形態のうどん屋があつた。暖簾越しにかつおだしの美味そうな匂いが流れてくる。

「お兄ちゃん、お腹すいた」ルミコ

正確な時間は分からぬが、感覚的に正午はどうに過ぎてこる。うどんの匂いがしなくても腹が減つてくる時間である。

「今から最後の切符を買ひに、それでお釣りがあつたら、うどんを食べよ。ちよつとここで待つとき。」私

「うどん屋の暖簾の横を通りて切符売場へ行く。窓口には怖そうな顔のおじさんがいて、私に気がついた。

「どこに行きね?」おじさん

「えつとえつと、ちよつと待つて。」

とポケットの紙を探す。ところが行き先を書いた親父の紙がない。福岡天神の西鉄バスセンターの時にも、バスの中でも見たのに、ポケットの中にはない。」

「どこに行くとねつて。」おじさん

「お父さんのおばさんの家に行きよつと。」私

「そりよかばつてん、なんて言つ停留所ね?」おじさん

「えつと、あ、あ、あー何とか。」私

「はあ? あんた自分の行き先の名前も知りんとね?」おじさん

親父の紙をなくしたのに動転して、アガノと言つ田的で忘れてしまったのだ。焦れば焦るほど、アガノが思い出せずにいた。

「あー、あーつて赤村ね? 赤池町ね?」おじさん

「あー赤池町! それそれ!」私

「赤池町のどこね? 赤池も広いけんね。」おじさん

窓口係員のややきつい口調に、叱られている錯覚に陥ってしまった私はさうに動転して、感極まって涙が出てきました。親父の紙をなくした。行き先の地名を忘れて言えない。親父の期待に応えきれない。腹を減らした妹が外で待っている。などいろんな感情が錯綜して收拾がつかなくなってしまったのだ。

「あらあら、泣かんでよかよ。坊主、ちょっと事務所の中をい入つてこいんね？」おじさん

窓口の横の扉から中に入れてもう、椅子に座らされた。これがさらについ詰められたような脅迫感を伴つてしまい、ますます緊張してしまつ。

「赤池町は間違いなかとね？」おじさん

「うん、その名前は聞いた事があるけん、」私

窓口係員は部屋の奥にいる同僚に声をかけた。

「原田君、君は赤池町やろ？」の子が行く先が分からんつて言こようつた。訊いちゃらんね？」おじさん

やや若い原田と呼ばれる男が私のところにやつってきた。

「ボク、赤池のどに行くんかね？近くにどんなものがあつたか覚えとうね？」原田

「まっすぐの道で、右に三本杉が立つていて、その向かいに白と赤のパラソルのお店があると。」私

「は～、それだけじゃなんとも分からんね。変わったもんはないんかね？」原田

「お父さんの生まれた家の近くに、お父さんの友達のお茶碗やらをつくる工場みたいなもんがあった。山の上には滝があつて、滝の下

あたりで泳げるところがあった。でも行くのはお父さんの家じゃなくて、おばさんの家なんです。」 私

「陶器？ 焼き物かね？ だつたら上野焼きやないかね？」おじさん

「ええ、滝つて白糸の滝のようですね。上野は私の実家ですしね。」

原田

そう言うと、原田と呼ばれる男は、私の顔をしげしげと見始めた。

「ボクや、マサヒヤんのトコやなこ~お父さん政彦つて言つんやない?」原田

「ん！ サイよ 何で知る？」
私

原田・山田の小説

「お父さんの知つてゐる人？」私

「おじさんとお父さんは幼なじみでね。一緒に遊んだもんだよ。小さい頃のマサちゃんにそつくりだよ。」原田

「笑いながら、原田は続けた。

「三本杉の前の売店ね。アガノにはお店が一軒しかないからね。その停留所は“上野口”って言つとよ。マサちゃんの姉さんの嫁ぎ先

「ああああ！ そうそう！ アガノ！ アガノって言うと！ 私

アガノと言う地名が出てきたことで私は安心した。緊張してこわばつていた身体が急に緩むのを感じた。

「アガノへ行くバスは今さつき出たばかりやから、あと一時間くらい待つとかないかんよ。時間がきたら呼んであげるから、待合室に座つときんさい。」原田

上野焼きと言つのは有田焼きほど有名ではないけれど、そこそこ有名の通つた陶器で、上野にはいくつも窯元がある。助つ人に呼ばれた原田という男が上野出身で、親父の知り合いでいたのだ。何せ田舎の事なので、近所の親戚関係はみんな承知の事実なのも、この窮地を抜け出すきっかけになつたのである。

「お兄ちゃん、お釣りあつた?」ルミ口

「ふ~、うん、お釣りはあつたけど、~、~、私

切符を買つた残りのお金はうどんを食べるには充分だつたのだが、私はこのお金を使ってはいけないような気がしていた。原田という親父の幼なじみが嘘を言つているとは思えないのだが、もしも万が一、何かの勘違いで私の思つてゐる停留所でない場合には、また新しく切符を買わないといけない可能性を残しているからである。その時にお金がなかつたらバスに乗れずに、おばの家にはたどりつけないのである。

親父とお袋

「ルミちゃん、あのね、お金はあるんだけど、ひょっとしたら次のまた次も、バスに乗らないといけないかもしれないけん、うどんは買えないとよ。」私

「えー、でも、お腹すいたよ」ルミ口

「水筒のお茶があるけん、お茶のんで我慢し。おばさんの家に着いたら何か食べさせてもらえるけん。」私

「あとどれくらい?」ルミ口

「バスがあと1時間くらいしないと発車せないから1時間半くらい

かな。」私

「え～、そんなに我慢できない～」ルミコ

「我慢できなくとも我慢しつて。お兄ちゃんもお腹すことうつてば。

「私

「つうええ、～、」ルミコ

「お腹がすいたくらいで泣かんと。お茶ば飲みつて。」私

可哀想だけれど、ニニドウジンを買つてやつて、おばの家に着かなかつたら、もつとひどい事になると私は思つていて。なくしてしまつた親父の紙を探してみた。いまさら見つけても仕方ないのだが、泣きべそをかく妹をちゃんと見る事ができなかつたのである。ズボンのポケット、上着の胸ポケット、～、ない。リュックにしまつた記憶はないのだが、何かしていないと妹の不満を聞かないといけないので探すフリをしていたのだ。

親父の託けの封筒、明日の着替え、タオルなどが要領よく詰められていて。お袋が準備してくれたものだ。その中に風呂敷のようなもの包まれたものがある。これは何だろつ。

「あ～おこぎりが入つとう！」私

「え？ おにぎり？」ルミコ

「うん、リュックサックの底の方に包みが入つてないか？」私

「ある。あるよ。お兄ちゃん。」ルミコ

包みを開くと、大きめのおこぎりが2個に、竹輪の油炒めと赤いワインナーが入つていた。お袋が自分たちの仕事用の弁当を作るときに一緒に握つてくれて、持たせてくれていたのだ。

「お兄ちゃん、食べて良いこと？」ルミコ

「おう～おう～よかくさ～食べうつせ。」ルミコ（待合室）は人がある

けん、外の、あの木の陰で食べひつ。行ひつ行ひつ。」私

「行こ！行こ！」ルミ口

おにぎりの中身は、私の好きな昆布の佃煮と、妹が好きなオカ力が入っていた。お腹がすいていたせいかもしれないが、口の中に何か甘いものを感じながら食べた。この時のおにぎりの味は今でも覚えている。遠くにいてもお袋の匂このするおにぎりだつた。

お腹がとりあえず満ちると、わづきの原田とこつ親父の幼なじみが言った事を思い出していた。

「ルミちゃん。お兄ちゃんつてお父さんの子供の頃にそつくりげなよ。」私

「誰が言つよるとね？」ルミ口

「お父さんの友達つて人が、切符売場におつてからへや。せげん言いよんしゃつたとよ。」私

「お父さんに似ていると言われたら嬉しい？」ルミ口

「え？ うん、嬉しい。なんか嬉しかね。」私

「気が付くと、田舎しから逃げるために入った木陰が、東の方向に長くなりかかつていて。水筒のお茶も飲みきつてしまつた。時刻は午後3時を回つた頃だらうか。

「お~い、あんたたち。バスが出るよ~。」原田

「は~い。今行きます。」私

「このバスに乗つていきんさい。車掌さんには、あんたたちの事ばちやんと言つとるけん、降りる停留所に着たら、教えてくれるけんね。」原田

「は~い、ありがとうございました。」私

「あ～、マサちゃんに、お父さんた堤の下ンとこりの原田ンとこのシゲ坊がよろしくって、言つとつてばい。」原田
「原田さんですね。はい。しっかり伝えます。ありがとうございます。」私

「ボクたち、次だよ。ほら、右に三本杉が立つていて左に紅白パラソルのあるお店があるやろ？間違いない？」車掌
「うん、間違いない！」口口！口口です。着いた。着いた。」私
30分ほどもバスに乗つただろうか。窓の風景は、街並みから田園風景にどんどん変わつてゆく。それまで平地を走つていたのに、上り坂が多くなってきた。田舎のバスは古いバスで、轟音と黒い煙を立てて登つてゆく。しばらく大きくカーブしながら登つていたかと思つと、直線道路になつた。窓からこの直線道路を見て私は確信した。この道は来た事がある。

雷鳴

親父は9人兄弟の末っ子で、長兄とは親子ほどの差がある。少子化に悩む現代では考えられないが、昔だとそつ多いほうでもない。戦争が子供の数を増やしていたのだ。事実、親父の兄弟のうち2人は戦争に行って帰つてこなかつた。上野のおばは親父の上から2番目の姉で、早くに母親をなくした親父にとつて母親のような存在だったのである。

そのおばの家は、三本杉の横の小道から入つたところにある。小道は下り坂になつていて、下りきつたところに灌漑の水路があつて、石でできた小さな橋がかけてある。その橋を渡つたところが広くな

つていて、そこがおばの家である。

「あ、じい、知つとひ。来たことある。」ルリロ

「おばあちゃん家たい。じいちゃん。」私

「お兄ちゃん、待つて。」ルリロ

あまりの嬉しさで、走らなくてはこのまま出していた。小道を下りて石の橋を渡つたらおばが迎えに出てくれていた。

「あーー、おばちゃんー。」私

「あはははー、カサちゃん、ルリちゃん。よう来たねえ。遠かつたやうひー。」おば

「うん、遠かつた。何べんも間違おひとしたばつてん、、、」私
「おばちゃん、わたしたちが来るとを知つとつたと?」ルリロ
「それがたい。あんたたちのお父さんが、朝から何回も電話してきてからね。バスの到着時間のたびに、もう着いたか。まだ着かないかつてうるさいのよ。」おば

家に上げてもらい、汗をふいてくつろいだ。

「おばちゃん、お父さんから託けがあるヒ。」私
「託け?なんかいな?」おば

おばは、渡された封筒を開けて、中の手紙に目を通した。

『姉さん、可愛い子には旅をさせるとか。すまないが、子供たちを今晚泊めてやつてくれ。ライスカレーが好きなので食わせてやつてほしい。』政彦

封書には手紙とお金が一千円入っていた。食事代金のつもりなのだね。

「あんたたちのお父さんらしいわね。」おば

大きく開けた障子から、心地よい風が吹き込んできて、風鈴はチリンと鳴った。振りあおぐと、あくまでも夏の空は高く、積乱雲がおおいつくしていた。ゴロゴロと遠く雷鳴が聞こえる。私は幼いながら達成感に満たされて、少し誇らしげな、少し大人になったような気がしていた。

夜になって、おじさんたち家族も帰ってきた。今日一日の出来事を話しながらの楽しい食事を過ごした。歓迎してくれているのは分かつたものの、一番話したい親父やお袋がいない事が不自然な感じで、変に気持ちが昂ぶっていた。

おばの家の風呂は、福岡では珍しい露天の五右衛門風呂で、庭のはずれに石造りの釜戸があつて鉄製の桶が埋められている。その桶に丸い板を敷いて入るのだ。お湯がぬるかつたら釜戸の横にある薪をくべるし、熱かつたら桶の横にある竹の筒を回して灌漑の水路から水を引き込み、溢れて流れたお湯は土間を伝わって水路に戻る仕組みになっていた。

私たちはこの風呂が気に入つていて、2人で背中を流し合つて遊んでいた。

ふと耳をすますと、虫の音や灌漑の水路を流れる水の音に混じつて、遠くから車の音が聞こえる。どこかで聞いたことがある車の音、どんどんこちらにやってくる。すぐ近くまでその音が来て、止まつた時に確信し、妹と顔を合わせて叫んだ。

「お父さんだー。」

たまらず、裸で裸足のまま、土間を伝つて玄関に駆け込んだ。
おばから、無事に到着した知らせを聞いた親父は、湧きあがつて来る興奮を抑えきれずに、我が子に会いにきたのだった。

かわいい子に旅をさせようとした親父の思い。けれど、子供を思い、心配し尽くし、気がつけば、一心に我が子のもとに駆せ参じた親父の思い。

遠く記憶をたぐれば、あの時に聞こえてきた雷鳴のことく、今また、自分自身にも、熱い思いが込み上げてくる。これより前も、これら先も、家族のために生きた親父がくれた、わが身に残る、忘れ得ぬ体験であった。

十歳にもならなかつたあの頃。このことがあってから、私は自分の中に、家族愛や、たすけあつ思いやりとかの感情や感覚が、少しずつ理解できるようになってきた気がするのである。

(後書き)

昭和の中くらい、今はどこかに置き忘れてしまった家族愛や触れ合つ
隣人のやさしさが、巷に満ち溢れていました。それらを感じながら
育っていた少年の気持ちが伝われば嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5614d/>

雷鳴

2010年10月9日11時34分発行